

第358回 昭和大学学士会例会（保健医療学部会主催）

日時 2019年7月20日（土） 13:00～16:53

場所 昭和大学横浜キャンパス 409号室

一般演題

1. 中堅看護師の看護実践能力とレジリエンスおよびチームアプローチとの関連

—看護実践能力向上に向けての卒後看護師教育のあり方—

昭和大学大学院保健医療学研究科保健医療学専攻
基礎・臨床・統合医療領域

田中 伸

昭和大学大学院保健医療学研究科

下司 映一, 安部 聡子

榎田めぐみ, 福地本晴美

椿 美智博, 藤後 秀輔

長嶋 耕平, 白戸 信行

【発表内容掲載論文】

投稿中または今後投稿予定

2. 医療系大学生を対象としたキャリアと健康に関する意識調査-1

—就労前のキャリア形成に関する実態—

¹⁾ 昭和大学大学院保健医療学研究科

²⁾ 昭和大学医学部衛生学公衆衛生学講座

³⁾ 昭和大学保健医療学部看護学科

⁴⁾ 昭和大学保健医療学部保健医療学教育学

⁵⁾ 昭和大学保健医療学部理学療法学科

⁶⁾ 昭和大学保健医療学部作業療法学科

山野 優子^{1,2)}, 大久保茂子²⁾

山内 武紀²⁾, 三村 洋美³⁾

榎田めぐみ⁴⁾, 仲保 徹⁵⁾

上條 史子⁵⁾, 増山英理子⁶⁾

下司 映一¹⁾

【発表内容掲載論文】

投稿中または今後投稿予定

3. 医療系大学生を対象としたキャリアと健康に関する意識調査-2

—女性の健康とジェンダー意識に関する実態—

¹⁾ 昭和大学医学部衛生学公衆衛生学講座

²⁾ 昭和大学保健医療学部看護学科

³⁾ 昭和大学保健医療学部保健医療学教育学

⁴⁾ 昭和大学保健医療学部理学療法学科

⁵⁾ 昭和大学保健医療学部作業療法学科

⁶⁾ 昭和大学大学院保健医療学研究科

大久保茂子¹⁾, 山内 武紀¹⁾

三村 洋美²⁾, 榎田めぐみ³⁾

仲保 徹⁴⁾, 上條 史子⁴⁾

増山英理子⁵⁾, 下司 映一⁶⁾

山野 優子^{1,6)}

【発表内容掲載論文】

投稿中または今後投稿予定

4. 看護職以外の分野での社会人経験を有する看護師のキャリア活用の相互作用

¹⁾ 昭和大学保健医療学部看護学科

²⁾ 昭和大学藤が丘病院

小松崎記妃子^{1,2)}

【目的】異職種経験をもつ看護師はキャリアをどのように看護現場で活かしているのか。また、その活かし方は、他の看護師との間で相互作用しているかを明らかにする。

【方法】異職種経験を1年以上もつ就業中の看護師と臨床経験5年以上の就業中にある共に働く看護師の各10名を対象とした。半構造的面接の内容を逐語録に起こし分析を行った。

【結果】コード数84。54サブカテゴリー、14カテゴリーが抽出された。カテゴリーは、異職種経験をもつ看護師では、【キャリアを示したくない】

【キャリアを示す】【キャリアを活かせない】【キャリアを活かす】【異職種経験をもつ看護師がみた共に働く看護師から得た対応】【異職種経験をもつ看護師がみた共に働く看護師から得た反応】、共に働く看護師では、【キャリアに目を向ける】【キャリアに目を向けない】【キャリアを活かすために配慮と工夫をする】【キャリアの活用ができない】【影響を受ける】【影響を受けない】【受けとめる】【受け入れられない】である。

【結論】異職種経験をもつ看護師のキャリアに目を向ける、共に働く看護師が異職種経験のキャリアを活かすために配慮と工夫をする、異職種経験をもつ看護師はキャリアを活かす、共に働く看護師は異職種経験をもつ看護師から影響を受ける、共に働く看護師は、影響を受けることで更に異職種経験をもつ看護師のキャリアに関心が高まり、キャリアに目を向けることで相互作用が働いている。

5. 冠動脈中等度狭窄に対する冠血流予備量比 (FFR) と流体力学 (CFD) 解析の関係について

昭和大学大学院保健医療学研究科保健医療学専攻
生体機能・形態解析領域

橋高 大介^{1,2)}

- ¹⁾ 昭和大学病院放射線技術部
- ²⁾ 昭和大学大学院保健医療学研究科生体機能・形態解析領域
- ³⁾ 昭和大学大学院保健医療学研究科
- ⁴⁾ 昭和大学横浜市北部病院放射線技術部
- ⁵⁾ 昭和大学統括放射線技術部
佐藤 久弥^{1,3)}, 中井 雄一^{2,4)}
加藤 京一^{3,5)}

【発表内容掲載論文】

投稿中または今後投稿予定

6. 非造影 MRI による肺動脈血栓描出の基礎検討

昭和大学大学院保健医療学研究科保健医療学専攻
放射線領域

吉井 伸之^{1,2)}

- ¹⁾ 昭和大学病院放射線技術部
- ²⁾ 昭和大学大学院保健医療学研究科
- ³⁾ 昭和大学藤が丘病院放射線技術部
- ⁴⁾ 昭和大学統括放射線技術部

安田 光慶^{1,2)}, 高橋 俊行^{2,3)}

佐藤 久弥^{1,2)}, 加藤 京一^{2,4)}

【発表内容掲載論文】

投稿中または今後投稿予定

7. 当大学病院歯科衛生士の入職後 5 年間の成長過程における悩みと問題解決の変遷

¹⁾ 昭和大学大学院保健医療学研究科

²⁾ 昭和大学歯科病院歯科衛生室

³⁾ 昭和大学病院歯科・歯科口腔外科

木村 有子^{1,2)}, 柴田 由美^{1,3)}

【発表内容掲載論文】

投稿中または今後投稿予定

8. 低流量麻酔時における安全な呼吸回路の検討

¹⁾ 昭和大学病院臨床工学室

²⁾ 昭和大学統括臨床工学室

³⁾ 昭和大学医学部麻酔科学講座

高森 修平¹⁾, 大石 竜^{1,2)}

上嶋 浩順³⁾, 大嶽 浩司³⁾

【発表内容掲載論文】

投稿中または今後投稿予定

9. Total-rib sparing を用いた自家組織乳房再建における内胸動静脈展開時の理想的な肋間選択とその評価

昭和大学大学院医学研究科外科系形成外科学専攻
佐々木淑恵
昭和大学医学部形成外科学講座

【発表内容掲載論文】

J Plast Reconstr Aesthet Surg. 2019;72:1000-1006.

10. 音楽大学大学院生における上肢機能障害の有訴率とトレーニング実施状況

- 1) 昭和大学保健医療学部作業療法学科
- 2) 昭和大学藤が丘リハビリテーション病院
- 3) 昭和大学スポーツ運動科学研究科
- 4) 洗足学園音楽大学大学院研究科
長島 潤^{1,2,3)}, 吉武 雅子⁴⁾
渡部 喬之^{1,2,3)}, 千賀浩太郎^{1,2)}
西中 直也³⁾, 磯 良崇³⁾
船登 雅彦³⁾, 三邊 武幸³⁾

【目的】音楽家は長期修練により高い技巧を凝らしハイレベルの楽曲を演奏する職業である。しかし Zaza は交響楽団員の有病率を 76% と報告している (1998)。今回は音楽家を目指す大学院生を対象に上肢障害の有訴率とトレーニング (TR) 実施状況を調査検討したので報告する。

【方法】対象: A 音楽大学 2017 年度に在籍する大学院生 118 名のうち楽器演奏以外が専門の 36 名を除く 82 名を調査検討対象とした。調査: 2018 年 1~2 月に質問紙法。結果は上肢機能障害の有訴率と TR 実施状況を集計、有訴率と楽器別・演奏歴や TR の関連を JMP pro 14 にて統計的に検討した。なお本研究は昭和大学保健医療学研究科人を対象とする研究倫理委員会の承認を受けた。

【結果】楽器専攻者 82 名に対し質問紙を配布し 62 名より回答を得た (回答率 75.61%)。回答者の主専攻楽器はピアノ 22 名, 弦楽器・打楽器各 11 名, 木管楽器 9 名, 金管楽器 5 名, クラシックギター 2 名, 電子オルガン・現代邦楽 (尺八) 各 1 名で平均演奏歴は 15.32 年であった。現在または過去に疼痛やフォーカルジストニアなど演奏に影響する障害を有した者は 40 名 (有訴率 64.52%) であった。TR

はストレッチ・筋力 TR・御木本メソッドやヨガなどが挙げられ, ヨガのみ有為に有訴率が低かった ($p = 0.0385$)。

【考察】有訴者 40 名のうち現状有訴者 16 名, 過去は 24 名であった。TR との関連は楽器別人数が少なく個別要因と思われた。今後は専門楽器別調査と身体的支援を計画中である。

11. 血管留置カテーテルに対する医療関連機器圧迫創傷 (MDRPU) 発生予防についての取り組み

- 1) 昭和大学江東豊洲病院看護部
- 2) 昭和大学保健医療学部看護学科
藤尾 敬子¹⁾, 福地本晴美^{1,2)}

【目的】2018 年度診療報酬改定に伴い, 医療関連機器圧迫創傷 (以下 MDRPU) に対するケアの標準化が求められている。MDRPU の予防には減圧と観察が有効であることから, 減圧が図れる医療材料を導入し手技の統一を図ることで血管留置カテーテル挿入部予防ケアの標準化に取り組んだ。

【方法】2018 年 6 月クッション・ドレッシングのサンプリングを実施。褥瘡対策マニュアルと看護手順を追加修正し, リンクナース, 各部署での説明と周知を行い, 8 月から手順に沿った固定を開始した。

【結果】血管留置カテーテル挿入部に発生した MDRPU は手技統一前 2 件 / 月に対し, 手技統一後は 0.5 件 / 月に減少した。

【考察】血管留置カテーテル挿入部は皮下組織が少なく, 関節の動きによる摩擦, ずれが生じやすい。また, 長期留置が必要な患者は鎮静, 浮腫, 皮膚の脆弱性を伴うことが多く MDRPU を起こす可能性が高い。そのため, 安全で安定した固定と減圧が図れる血管留置カテーテルの固定法を検討し, マニュアルと看護手順の整備, 見本作成による可視化, 体験学習, 不適切な固定方法の情報提供を行ったことは, 手技の統一と習慣化を図るうえで効果的であったと考える。また, 創傷被覆材と比較し安価なクッション・ドレッシングを選択したことで, 全対象患者に使用が可能となった事も周知と継続に有効であったと考える。

【結語】手順改定後に発生した MDRPU の要因を分析し, 患者の状態や, 手順の逸脱など評価や改定

の検討が必要である。

12. 精神障がい者に対する学生のイメージに関する文献検討

昭和大学保健医療学部看護学科
高野 幸子

【発表内容掲載論文】

投稿中または今後投稿予定

13. Rapid Response System (RRS) の取り組みについて

昭和大学病院看護部
三浦 まき

【発表内容掲載論文】

投稿中または今後投稿予定

14. 災害対策の研修を多職種合同で実施する効果

¹⁾ 昭和大学保健医療学部
²⁾ 昭和大学病院看護部救急外来
舎利倉幸香^{1,2)}

【発表内容掲載論文】

投稿中または今後投稿予定

15. 高齢 COPD 患者における 3 つのフレイルモデルとサルコペニアモデルの比較検討

昭和大学大学院医学研究科内科系内科学（呼吸器・アレルギー内科学分野）専攻
平井 邦朗
昭和大学医学部内科学講座（呼吸器アレルギー内科学部門）

田中 明彦, 本間 哲也
金子 佳右, 宇野 知輝
佐藤 春奈, 眞 鍋 亮
大田 進, 楠本壮二郎
山口 史博, 鈴木慎太郎
相良 博典

【発表内容掲載論文】

Geriatr Gerontol Int. 2019;19:896-901.

16. 先天性心疾患術後遠隔期での中高年女性の運動耐容能

¹⁾ 昭和大学保健医療学部理学療法学科
²⁾ 昭和大学藤が丘リハビリテーション病院臨床病理検査室
³⁾ 昭和大学スポーツ運動科学研究所
⁴⁾ 昭和大学藤が丘病院循環器内科
⁵⁾ 昭和大学保健医療学部
⁶⁾ 昭和大学藤が丘リハビリテーション病院循環器内科
北井 仁美^{1,2,3)}, 江波戸美緒⁴⁾
三邊 武幸³⁾, 鈴木 洋⁴⁾
下司 映一^{3,5)}, 磯 良 崇^{3,6)}

【発表内容掲載論文】

投稿中または今後投稿予定

17. 脚長差が体幹筋収縮に与える影響

昭和大学大学院保健医療学研究科保健医療学専攻
運動障害リハビリテーションと呼吸ケア領域
結城 美香
昭和大学保健医療学部理学療法学科
宮川 哲夫, 佐藤 満

【発表内容掲載論文】

投稿中または今後投稿予定

18. 骨格筋の活動後増強現象が運動開始時の筋活動の増加率に与える影響

昭和大学大学院保健医療学研究科保健医療学専攻
運動障害リハビリテーションと呼吸ケア領域
松本 直也
昭和大学大学院保健医療学研究科
佐藤 満

【目的】筋の強収縮後に最大筋力が即時的に増強する現象を活動後増強（Postactivation Potentiation：PAP）といい、主にスポーツ分野で研究がされてきた。一方、日常生活動作の再獲得を目指すリハビリテーションでは最大筋力の即時的増強より、動作に必要な筋張力に達するまでの時間が短縮する方が重要である。しかし PAP によってその時間が変化するかについて検証した報告はない。そこで本研究

は PAP による運動開始時の筋活動の増加率の変化を明らかにし、リハビリテーションで PAP が有用かどうかを検証することを目的とする。

【方法】被験者は健常成人男性 15 名（年齢 23.2 歳 ± 1.7 歳，身長 172.3 ± 6.1 cm，体重 65.0 ± 4.9 kg）とした。足関節底背屈の等速性運動（60 deg/s）時の前脛骨筋を被験筋，PAP を生じさせる事前の強収縮を 6 秒間の等尺性収縮とし，その前後での最大足関節背屈トルク，運動開始時の背屈トルク増加率，筋活動発現から関節運動開始までの電気力学的遅延を関節トルク測定装置と表面筋電計を用いて測定した。

【結果】最大背屈トルクは PAP により平均 5.3% の即時増強を示した。背屈トルクの増加率は強収縮前 16.47 ± 4.86 Nm/s，強収縮後 17.95 ± 3.95 Nm/s と統計学的に有意な増加を認めた。電気力学的遅延は強収縮後で平均 0.002 秒短縮したが有意差は認めなかった。

【考察】PAP は最大筋力だけでなく運動開始時の筋活動の増加速度を即時的に向上させることが明らかとなり，リハビリテーションにおいても筋の収縮速度を改善する一手法として有用であることが示唆された。

19. デノスマブ初回投与時と 2 回目投与時の比較における低 Ca 血症の発症時期とリスク因子の検討

—骨代謝回転評価の重要性—

昭和大学大学院医学研究科外科系整形外科学専攻
土谷 弘樹^{1,2)}

¹⁾ 昭和大学医学部整形外科学講座

²⁾ 山梨赤十字病院整形外科

石川 紘司¹⁾，谷 聡 二¹⁾

大下 優介²⁾，工藤 理史¹⁾

白旗 敏之¹⁾，永井 隆士¹⁾

豊根 知明¹⁾，稲垣 克記¹⁾

【発表内容掲載論文】

日骨粗鬆症会誌. 2019;5:23-30.